

びわこの考湖学

「天下の台所」とは江戸時代の大阪を指した言葉です。この繁栄は江戸時代に全国の

藩が年貢米や領内の特産物を販売するため、倉庫兼邸宅である蔵屋敷を設けたことによるものです。そもそも蔵屋敷は大坂、江戸、敦賀、大津、堺、長崎など、商業都市に設けられたものでした。

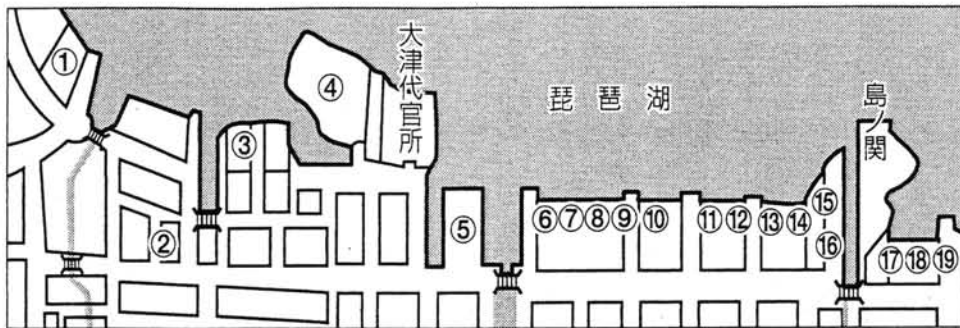
江戸の蔵屋敷では旗本の蔵米の売却が行われることから、幕府の米価政策によって諸藩保有の年貢米の売却に対して制限がかけられることがあり、東日本の藩であっても大阪に蔵屋敷を持っていました。西回り航路の開発も進展を支え、大坂は商都として繁栄し、こんにちの商人の町大阪に引き継がれています。

の港に蔵屋敷が設けられていたのは大阪だけでした。

豊臣政権下において、東国・北国の諸藩からの年貢米をはじめとする物資は、日本海沿岸の敦賀、小浜から塩津、海津、今津などといった琵琶湖北部の港へと運ばれ、琵琶湖上を大津へと回漕され、そこから大坂や伏見へと持ち込まれたのです。大津は単なる通過地点ではなく、東国・北国の物資、つまり、日本の約半分の物資が集結する地であったのです。

当時の領主にとっては、いかに農民から年貢米を徴収するかもさることながら、徴収した年貢米をいかに有利に換金し、渋滞なく輸送するかが大問題だったことでしょう。そのため、大津の蔵屋敷が極めて重要な役割を担っていた

大津蔵屋敷



たことがうかがわれます。たとえば、加賀百万石の前田藩は元和2(1616)年に「御蔵米毎年大津へ三ヶ

- ⑮ 旗本
 - ⑯ 丹後宮津藩
 - ⑰ 肥前唐津藩
 - ⑱ 若狭小浜藩
 - ⑲ 旗本
- ＝『図説大津の歴史』(大津市歴史博物館市史編さん室)より

- ⑤ 近江彦根藩
- ⑥ 上野廐橋藩
- ⑦ 近江大溝藩
- ⑧ 志摩鳥羽藩
- ⑨ 旗本
- ⑩ 旗本
- ⑪ 丹後峰山藩
- ⑫ 越後長岡藩
- ⑬ 陸奥弘前藩
- ⑭ 近江仁正寺藩

現在の津市浜大津付近に立ち並んでいた江戸時代前期の蔵屋敷の配置図。番号は所有者で、①加賀藩 ②甲斐府中藩 ③近江小室藩 ④幕府

「一」する旨を命じています。つまり、当時の加賀領内の全生産高約120万石の約半分が藩のものとすると、そのうちの3分の1である約20万石が大津へと持ち込まれていたことになるのです。

大津代官所に隣接して、御蔵(幕府蔵)20棟が、大津城本丸跡地の琵琶湖岸に軒を連ねていたそうです。その他諸藩の蔵屋敷も琵琶湖に面し

て、19カ所もあったといえます。

17世紀前半、大津は大坂とともに西日本有数の米市場を形成し、中でも幕府の畑作年貢を決定する基準、つまり全国米相場の指標ともなっていました。この時期、大津は「天下の台所」であったのです。

井原西鶴の『日本永代蔵』(1688)には興味深いことが記されています。「むかし、大津にて千貫文のさし引きを、世界になき事とさたせしに」とあるのです。銀1000貫目の「さし引き(借金)」という例のない巨額のやりとりが大津で行われていたというのです。

ただし、西鶴の時代には京・大坂では3500貫目や4000貫目という借金で倒産するものが出てきたといえます。つまりは、かつて大津で行われていたような大金のやり取りは、今や京・大坂でも行われるようになったということです。

その後、大津はどのように変わっていったのでしょうか。それについては次回お話しすることになります。

17世紀の「天下の台所」

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)